

## 権原理論に基づく教育財の分配と公正

—— R. ノージックを下敷きにして宮寺晃夫『教育の分配論』を読む——

西 口 正 文\*

The Distribution of Educational Goods and its Fairness  
Based on the Entitlement Theory :  
Reading *Distribution of Education* by Akio Miyadera  
after the Model of Robert Nozick

Masafumi NISHIGUCHI

### 構成

【零度：考察にあたっての視座】

【壹度：公共性・他者性・多元性をめぐる問題論的構制】

【貳度：「共通理性と教育」をめぐる問題論的構制】

【参度：教育財の分配に関する優先論と「教育倫理学」をめぐる問題論的構制】

### 【零度：考察にあたっての視座】

零-(0) 学知への著者の向かい方

探究すべきなんらかの主題を、とりわけ自分こそがその探究の筋道を切り開くことができるとの自負を持てるような主題を、見出し得た者にとって、学問的営みは、自らの持てるエネルギーを挙げて傾注させることのできるほどに魅了するものとなる。教育という財（資源）<sup>◆1)</sup>の正当で妥当なる分配はいかにして可能か、そしてそれ以上に根本的に、教育という財（資源）の正当で妥当なる分配とはそもそもいかにあるべきか、という規範的探究主題を見出すことができ、それを先導的に切り開ける者としての自負を持つに到り得た者は、その探究のための努力を怠らない。そうした探究活動の成果が、宮寺晃夫『教育の分配論』である。当の主題にかかわりの深そうな・重要度も高いであろう内外の数多の研究論文・著書への配視を為し、それらを自らの関心の在処に結びつけて解釈を試みる、という地道で根気強い取り組み。巻末の文献一覧を見るだけでも、精力的な渉猟の上に、この研究成果が発表されているのだ、と推察できる。そうした著者・宮寺晃夫の“称賛”されるべき学知的エネルギーの所産としてこの著作に向き合うことが為されてよいであろう。凡百の教育研究者に見られがちな、“こどもの可能性”信仰や“発達科学”信仰という洞窟に居座る俗流学知の域を越えて、哲学や倫理学における現代的知の最前線にも切り込もうとする姿勢が、感じ取られる。

本稿は、筆者にとって（——能力をめぐる正義を問うという視座から教育的理性批判を試みつつある筆者にとって）注目すべき著作として、2006年に刊行された宮寺晃夫『教育の分配論』

---

\*人間関係学科 准教授

という作品を取り上げ、その議論の特質を明らかにし、さらにその議論への批判的検討を行なおうとするものである。こうした論題に取り組むにあたっては、対象とする著作の問題論的構制を明らかにするという作業が中心となるであろう。

この作品全体の叙述内容をふまえてここで先取りして触れておくならば、著者宮寺は教育事象を素材にしてリベラリズム本流の知を規範的に確立しようとしている。リベラリズムがいわばその内側からロールズ『正義論』の衝撃を生み起こして以降、関係論的“偏向”を来たしたり、コミュニタリアンなどその外側からの揺さぶりによって不安定化を来たしたりする中で、リベタリアン流の権原理論の基層に共感を寄せ親和しようとする構えを——そしてその構えのもとにリベラリズムを建て直し、いわばその本流へと帰還させようとする志向を——滲み出させているところに、宮寺の基本的スタンスは、既に見て取れるところである。

翻って、宮寺の志向するリベラリズム本流とは、西欧近代という特殊な歴史状況に伴うかたちで理念的に作為され支配力を揮ってきた思惟パターンである。教育という営みに纏わる生の窒息情況に、その情況と私的所有秩序や能力主義秩序とのかかわり合いを見失うことなく、まなざしを向けようとするところからは、西欧近代の社会秩序の構築を領導してきた思惟パターン自体の限界が、とりわけ人-間という間柄のあり方を規律する巧妙なる抑圧のメカニズムとその正当性問題が、こんにちにおいてこそ鋭く問われなければならないはずである。そうであってみれば、ほかならぬそのリベラリズム本流が普遍性を帯びた価値志向の対象たりうると読み込もうとしてその建て直しに類なき真摯さと精力的な知的エネルギーを注ぎ込もうとする著者宮寺の思考の構え自体、そのセンスが問われてよいだろう。

#### 零-(1) “社会の財の分配”と“教育という財の分配”との関連づけ

著者宮寺による問題論的構制を叙述する序章の中の冒頭部（といってもよいような箇所）に、まず注目されるべき次のような言辞がある。「教育は……社会のすべての人にとって幸福追求上なくてはならない基本的な財・サービスであり、特定の属性を有する人……に占有されてよいものではない。」（1頁）<sup>◆2)</sup> 人の善き生を求める営みにとって——幸福追求のうえで——教育とは“なくてはならぬ”事柄だと、懷疑なくみなしたうえで、それが万人に提供されるべきことも当然視されている。著者にとってその「教育」とは、この国においても他の国々においても既に営まれている、国民教育システムとしての教育のことにほかならず、それとは異質の意味へと跳躍する・冒険する営みを念頭に置いているのではない<sup>◆3)</sup>。この論稿の筆者西口から見れば、「教育」へのこうした向き合い方をそもそも肯認しがたい。近代・現代社会の国民教育システムと善き生の追求をめぐる人-間関係の制御といい物象化ということとの関係をいかに捉えるべきか、についての争論に、ここで入り込むこと、それは禁欲したほうがよいだろう。ここではむしろ、上に引用した言辞を下に示す、この著作の「はじめに」という文章からのもう一つの引用と照らし合わせることによって、著者にあっては、個々の人に能力主義の（もしくは業績主義の、あるいはまたメリットクラティックな）社会構成原理を内面化せしめ、全体社会として能力主義による社会編成構造を再生産せしめる、その営みにおいて教育が“なくてはならぬ”事柄だと、懷疑なくみなされていることを確認しておくことが重要だ。

教育は、財を産み出す資源として、人びとの間に異なる程度に分配され、それを通して人びとを社会の異なる地位や職業や資格に振り分けていき、しかもこうした人びとの階層上の布置を一元的な審級によって正当化し、社会が体制として安定的に維持されていくのに寄与している。教育は分配される財であると同時に、他の財を分配していく財でもあるの

である。(iv頁)

社会の財の分配は、むしろ能力主義（あるいは業績主義）によるわけだが、そのことを正当化して社会秩序を安定化させるためには、教育という財を公正に提供し個人への教育の成果を評価すること、つまり、単に形式的ではなくて実質的に平等な教育の機会を提供したうえで、提供された機会を活かして成果と貢献を挙げ積もる競争へのフェアな参加を保障し、その成果を評価すること、これがなされなければならない。教育という財の分配は、全体社会の能力主義的編成構造の基層に位置づきその構造を再生産するために不可欠になる事柄なのだ、とする想念が、ここにはゆるぎなく流れている◆<sup>4)</sup>。

#### 零-(2)「教育の視点」の強調

いましたが論及したところの、全体社会という規模での財の分配の“正当性”・“公正さ”を構築するに際して教育という財の分配のあり方が基層に位置づくということ、この点に関して立ち入って考察しておこう。留目にあたいるのが、次の箇所である。

平等理論、共同体理論、権原理論の論者たちは、いずれも、財の分配を受ける側の個別の特性……自体が、形成されたもの／形成され得るものであることを重視して、どのような環境のもとでそれが形成されたのか、そのさい当人に責任がない仕方では形成されてはいないか、といった背後の諸関係を抜きには分配の公正さは語れない、ともみなされてきた。……教育は、何らかの原則に従って分配されるべき財という側面からだけでなく、他の様々な財の分配が公正になされていくための前提に関わる規定要因、という側面からも注目されてきている。この後者の側面を、財の分配論に内在する「教育の視点」と呼んでいくことにしよう。(2-3頁)

ここでは、それぞれの人の個別の特性が形成されたもの／形成され得るものであること、そのことに重きを置こうとしている。そしてその形成される過程における当人の責任の有無が重要視されるべきだとする考え方を推し進めようとしている。こうした考え方の脈絡においてさらに留目されるべきなのが、次の箇所だ。

環境にふくまれる形成要因は、個人の意思で再構成できないものでは決してない。一人ひとりに独自の特性も、ある程度までは自由意思により再形成し得るものである。環境の形成要因の再構成可能性と、人の特性の再形成可能性、少なくともその潜在的可能性を留保しつつ、分配の公正さが語られるようになってきている。……(「環境条件」と「人の特性」という一筆者による補註) 両項の間の形成-被形成の関係と、人の特性の再形成の可能性が『公正な分配』を語るときの視点に組み入れるようになってきたのである。……被分配者の特性の形成過程に関与した環境条件を考慮に入れ、その主体的な組み替えにも可能性(と自己責任の余地)を残しておかなければ、分配の公正さは語るができない。(3-4頁)

著者はここで、優劣度合に傾斜をかけて想定している「人の特性」について、それが諸関係のもとで決定されてくることに配視しつつも、その当人による再形成が可能だということを強調している。そうした強調は、(人の特性への形成要因としてとりわけ強大であろう)環境に対してさえ再構成が可能であることに留意を促すことを通してなされており、ひとそれぞれの特性に当人の制御が効かないわけではないことを、そこに自己責任の余地があることを、論じている◆<sup>5)</sup>。

こうした論脈をふまえて著者は、「教育されるべき存在」として人間を見ることの大切さを述べ立てようとする。即ち、ヒトは「教育されてはじめて『人間』となることができる存在」

なのであり、教育され能力を形成・開発するということは人のあり方が環境によって受動的に決定され規定されてしまうのではなくて、「より善き生き方を自己決定でき、社会的な責任を担っていかなければならない主体的な存在」だということなのである（4頁）。著者は人の特性の再形成可能性を——ひとそれぞれの能力の主体的なる形成・開発可能性を——、教育という営みに相即させるかたちで、このように強調するのだ。ここでさらに、教育という財が公正に分配されるべきことが、つまり能力の主体的なる形成・開発可能性を顕在化させるのための条件を公正に保障すべきことが、念頭に置かれているはずであることをも推察しうるところだ。

### 【忓度：公共性・他者性・多元性をめぐる問題論的構制】

#### 忓-(0) 焦点と課題

【零度】において示した視座から、この【忓度】においては、対象とする作品の中で内容上の中心のひとつとなるであろう第7章に焦点を合わせて、公共性・他者性・多元性をめぐる問題論的構制を明らかにし、検討を加えることにする。

#### 忓-(1) 第7章における主題に寄せて

この章の題名を著者は（そこに深い含意を込めてか）二様に——「リベラリズムと変貌する国家」と「国家とリベラリズムの論点」とに——表わしている。二様の名を持つこの章における主題を、著者自身による言辞を以て示すと、次のようになる。「90年代以降アメリカ知識人が回帰しているアメリカニズムという一種の国家論、とりわけその思想的基盤としてのプラグマティズムを相対化していくための立脚点として、リベラリズムの論点を三つの側面から再確認し、リベラリズムの射程を見定めていく試みである。」（198頁）つまり、現代的な思想状況の複雑化の中でリベラリズムに立脚する国家の描像を、就中、望ましき国家像を、探り当てようとするに際しては、リチャード・ローティのプラグマティズムに（……念のため付け加えるならば、リベラリズムとも親和性を帯びてあるそれに）拠って立つ国家観ないし国家論を検討しておく必要がある、という含意である。そうした検討作業を経由することを以て、こんにちわたしたちが向き合うべきリベラリズムの論点が、そしてさらにリベラリズムの真価が、かえって明らかになってくるのだ。こうしたねらいをもってこの章での議論が展開されている。

#### 忓-(2) リベラリズム本流にとってローティ派プラグマティズムを持ち上げることの意義

読者に対して著者は、次の点に目を向けるように促している。すなわち、1990年代に移りゆく頃ものした文章の中で、ローティが下記の（1）と（2）の調停を自らの課題とするのだと述べていた点に。（1）：真理の試金石は、自由な議論だけである。（2）：自由な議論は合意へと収斂するのではなく、その反対に、新たな語彙を増殖させ、〈どの語彙を使用すべきか〉という点に関する際限のない議論を増殖させる。

この点について敷衍するかたちで著者が言及しているように、「収斂していくことのない自由な議論と語彙の増殖は、……立場間の多様性を含んだまま政治的な連帯にこそ導かれていく。その連帯も、普遍的原理にもとづく個と全体との融合である必要はなく、個と個のつながりの累積として展望されていた。」（199-200頁）ここに著者は、ローティならではの慧眼を読み込もうとする。つまり、リベラリズム本流にとってあらためて立ち帰るべき発想の基点＝起点が示されている、というふうを受けとめるのである。普遍妥当性を権利請求できるような正義の原理によらずとも、生活世界での身近な事柄をめぐる懸案事項について開かれた討議を積み

上げるところに、「政治的連帯 (I) (?)」の形成を展望できるとする。手続き合理性を基軸に据えた討議倫理もしくはコミュニケーション的理性への全幅の信頼——一元的な“合意”に向かわずとも（多元性を抱え込んだの）“連帯”は可能だとする論理の運び方。プラグマティズム伝統の思考に拠りつつも、“アイロニカルな”リベラリズムに親和的な思考の筋道を選び探ろうとしてきたローティは、宮寺の思考にとって導きの糸たりうるのだ。

壱-(3) 章題に込められてあること

リベラリズムが“文化左翼”の影響下で変質する様相を呈する中で、リベラリズム本流の思惟にとっての核を捉え返すためには、R. ローティの思想に学ぶ必要性がおおいにある。ローティの思想をくぐることによって、リベラリズムの今日的な論点を押え直し、以って〈手続き合理的価値〉に依拠すべき西欧近代国家の本来像を——まぎれなきリベラリズムが具備すべき「公共性論」から派生するであろう国家像を——描き出すための手がかりを得ようとする。これが、この章題に込められてあることになるだろう。

壱-(4) 第1節「ローティと国家」を読む

ローティに見られる“アメリカニズムの体質”は、差異化されて捉えられるべきものだ。端的には、こう要約できるだろう。すなわち、保守主義に立つ知識人たちとローティを同列に置くことはできない。また、マイケル・ウォルツァーのような進歩的知識人たちとも異なる。異なりつつも、「アメリカニズム」に——“自由民主主義”的アメリカ合州国の体制を肯認する構えの思惟型式に——同調している点では、上記知識人たちと共通していると言える。とはいえ、著者は、「メンバーシップの確定にできるだけ自由度と効用性を残しておこうとする構え、つまりリベラリズムとプラグマティズムへの格別の思い入れ」(197頁)という点において、ローティのアメリカニズムへの傾斜のありようには特徴を見て取ることができるのだ、と述べる。

壱-(5) 第2節「アメリカニズム・リベラリズム・プラグマティズム」を読む

ローティにあってさえなお——プラグマティズムの伝統的発想枠組み内へのリベラリズムの包摂という傾動を持つがゆえに——陥りがちな“アメリカニズム”の「歴史主義的正当化」に歯止めをかけるためにも、「他者性」と両立する共通性の枠組みを構築することこそが、いまあらためてリベラリズムの課題として意識され直す必要があるはずだ。しかもその際に、ロールズのごとく普遍的正当性としての権利を訴えかける原理の構築というやり方ではなくて、ローティ流のプラグマティズムに基本的な与するかたちで、同時に“リベラリズム本来の自己相対化的批判機能”をも保持しつつ、構築することが、課題となるはずだ。こう著者は論じる。

壱-(6) 第3節「リベラリズムの論点1—公共性」を読む

リベラリズムの構成素たりうる公共性概念とは、「共同性」との対質を通じて、また、「私的原理」の蘇生を通じてこそ——「私的原理」の蘇生を経ずして一足飛びに公共的資質を備えた「市民」形成と「市民主義」的思惟に駆け上ろうとするのではなくて——、徐々に獲得されゆく性質のものだ、と考えておきたい。こういう著者の願望が述べられてある。

壱-(7) 第4節「リベラリズムの論点2—他者性」を読む

近年はやりの「他者性」論は、個としての自己を基点＝起点に据えた議論の組み立てを脱しようとするところの——〈自我〉を関係性に解体してしまうところの——ポストモダンの風潮に掉さすものであり、立論自体の恣意性から免れず、それゆえに正当化の権限からも責任からも逃れたままに唱えられるものである。それゆえに、リベラリズムにとっては、特にリベラリズム本流を辿りゆこうとする者にとっては、それに与するわけにはいかず、端的に斥けるべき底の議論だ。このように著者は、この節で力説している。

壺(8) 第5節「リベラリズムの論点3—多元性」を読む

「西洋の文化」(＝西欧近代文明)の持つ最良の価値枠組みに基づいて——その中心には、個人のアイデンティティを保持するための“自由”と“多元性”が具備されてある価値枠組みに基づいて——，“他者”をその価値枠組み内部でのもうひとりの個人として遇していくこと。そうして、わたしたち自身の思考の枠組みを広げる努力をし続けることこそが、「リベラリズム」の名のもとで正当になしうることなのであり、なすべきことなのでもある。《——そうした努力自体を相対化せんとして枠組みの外に出て行くことであっては、断じてならない。》このように著者は、この節で力説している。

壺(9) 「私的原理」へのまなざしに関する検討

ここに取り挙げようとする問題圏に関しては、著者の叙述がとりわけ錯綜し曖昧で微妙な言い回しが多々見られるところである。そうであるから、読解に重度の困難が伴い、そのことはまた、批評を試みる段にはいっそうの困難を覚えさせることにもなる。とはいえ、著者の主張の根幹に触れ合う問題圏であるようにも直観されるところだ。そこで、かなり大胆に批評を試みることにする。

まず宮寺にとって戦後日本の「市民主義の社会科学」中に登場した〈市民〉像は、歴史的環境状況のもとでの負荷がかかりすぎていたという見方を提示し、その見方に関連づけるかたちで、その〈市民〉像の形成過程の実際の帰結としてはむしろ既在の(既得権益を守り拡張しようとする)勢力圏への「動員」になり終わっていた、とする中野敏男による分析を援用している。宮寺にとってはしかし、「こんにちの非営利的で自発的なヴォランティア活動にまで」(それが“主体性”を「動員」に回収してゆく事態であるとして)批判の視線を差し向けようとする中野を、受け容れることができない。中野の立論は視野閉塞的発想に陥っており、個人の自由意思や自律・自立性の発現を——その可能性の所在を——正当に見ようとししないのだ、というふうに不満を表明している(204頁)。

リベラリズムにとって不可欠の構成素であるとして著者が何よりも強調するかたちで提起する「公共性」。これを担う主体のありようとして著者は、私利私欲という個人の「私的原理」にしたがって動く人間像を肯認しようとする立場に立って、敢えて個人の私的自由を承認するところから公共性が築かれてゆかねばならないとする立場に立って、主張しようとしている(203-207頁)。そうした脈絡で持ち上げられるのが、“公共性は私利私欲の上にこそ築かれねばならぬ”という言挙げである。この議論の運びがはたしてなんらかの触発をもたらしえたのか、と問うならば、否である。「近代において公共性は、私的原理の上に構築されるほかないのである」と開き直ったところで、考察を閉じるに留まっている。

翻って、宮寺の問題論的構制に沿って考えるにしても、〈公共性〉を問うには、謂う所の「私的原理」による諸行為(の集合)から出来する諸個人間の、もしくは諸共同体間の、利害の相

剋を制御し調停する社会秩序の形成へと理路を進めて行くことを要するはずだが、そのことに著者が成功しているとは思えない。《というよりもむしろ、〈公共性〉をめぐる問題感覚に敏感さを欠いている。》この問題圏は、〈他者性〉にリベラリズムがいかに対処するかをめぐる問題圏へと、つながってゆくだろう。

#### 壺-10) 〈他者性〉へのまなざしに見て取れる防御の構え

謂う所の「『他者性』論」に向けて著者は不信感を抱き、さらには嫌悪感をも表出している。そもそも〈他者性〉とは、社会秩序が構築-再構築される動的過程の諸時点において既に支配力・通用性を獲得してある〈第三者の審級〉のもとで——具体的なる諸規範を産出せしめる原理のもとで——、抑圧され生存を脅かされるもする身体たちが《いわば逸脱身体・異端身体たちが》生存の安寧を得んがための〈存在の自由〉の余地を・その拡充を求めて、“正常なる”・“正統なる”身体たちに呼びかける場合に、その呼びかけにいかに対応するか、呼びかけ-応じる関係が生成するか否か、という論脈でこそ、問題化されうる事柄だ。そうした論脈を重要視する発想のもとでは、倫理ということが、〈他者〉への呼応・応接が可能《responsibility》となるための条件に照準して、あるいはまた、自己とは異なる意味志向の拠点である他の身体といかにして交通が可能となるのかに照準して、議論されることになる。

ところで、少なくとも理念上は、「ひとりひとりの個人の自由意思と自律性の尊重」を第三者の審級の重要な一部面としている西欧近代の社会システムにあっては、個人の自由意思の発動および自律性の発揮のための条件の保障を（さらに付加すれば、自己責任の原則を）拠り所とする思惟にとって、〈他者性〉が問題化される論脈は、およそ意味秩序の系に入って来ない。《すなわち、所定の〈第三者の審級〉を成り立たしめている“理性”が画する意味秩序系ゆえに、“理性”の他者からの呼びかけはノイズとして遇される。》そして当の第三者の審級にいつそう能動的に・いつそう厳格に拠って立とうとするリベラリズム本流の立場にあっては、道徳的思考の起点（≒基点）も「ひとりひとりの個人の自由意思と自律性の尊重」に求められることになる。著者が〈他者性〉を矮小化して捉えて彼流の「『他者性』論」を描出し、その「『他者性』論」に対して表層の検討を為すにとどまっているのは、ましてや自己の思考基盤を問い直す契機として考察するための視座を見出すこともなく済ませているのは、大要、こうした事情によるものだ。

#### 壺-11) 構成素たり得る多元性と西欧近代文明の価値枠組み

リベラリズムに本来的に備わっている機能として著者が強調する「自己相対化的批判機能」（201頁）が、〈他者性〉へのまなざしのありようから察せられるように、貶値され矮小化されてしまう。そのことへの覚識は、むしろ著者には生じていない。むしろ、ウンベルト・エーコに依拠するかたちで、西欧近代文明の価値枠組みこそはなんといっても他の文明の追従を許さぬ程度において「自由で多元主義的であることが手放せない価値である」点を知悉している、と論じ進める。かくして著者は、西欧近代を“未完のプロジェクト”とみなす想念を受け容れ、諸個人の自由で多元性・多様性へと開かれた議論のもとに、手続き合理性を厳しくふまえた社会形成を——そうした脈絡で規定されるところの“公共性”を帯びた社会形成を——進めて行くならば、自律した諸個人が各々の立場の多様性を含んだままに、政治的な連帯が可能となる、そのようなまさに“リベラルな社会”にあって「国家」というのはたぶん、自由で開かれた議論のもとに手続き合理的な意思形成が円滑になされ、そのことに基づく社会運営が安定的・効

率的になされるように、経営管理の機能を果たす仕掛け（機構）であるのだろう。ここに敢えて付け加えるならば、いましがた述べたところの国家という機構は、手続き合理性を基軸に据えた諸価値を次なる世代に継承すべく制度化された“教育”という営みを経営管理する機能を果たす仕掛けでもあること、そのことを望ましいと著者はみなしているであろう。

## 【式度：「共通理性と教育」をめぐる問題論的構制】

### 式-(0) 議論の概要

本稿が取り挙げている作品の全体を通して著者が主張しようとしている事柄、その事柄の中心にあたるところを把握しようとするうえで、その中心への伏線を敷く箇所として重点的に視軸を向け検討する必要があると思われる「共通理性と教育」（作品中では“補論三”として収載されている論文）を、ここでは対象とする。この論文での議論の概要をまずは押え、そのうえで、批評としての言及を行なうことにしよう。

ジョン・ロックの教育論に触発されて気づかれるところとして、「理性」なるものが人間の魂の中にだけでなく、さまざまな領域に遍在していること、これがある。「理性」なるものがそうして数多の領域にわたる汎用性を帯びているところから、むしろ「共通理性」と呼びたくなるものが在るような気がする。「理性」もしくは「共通理性」とは、「万物を統べる創造主が、人の内部に組み込んでおいた概念装置のようなもので、それがあるから、被造物のなかに創造主の作意が読み取れる。」（218頁） 理性のはたらきがあるがゆえに、感じたり考えたり行動したりするときにあるべき姿を——人為を超える当為や法則性を——想起することができる。

人間の倫理ということに引き付けて言えば、「理性を、わたしたちと共有していると認められる限りで、遠方からの来訪者も、同胞として迎え入れる。」（218頁） ひとびとは各個に小文字の‘reason’を宿しているのみならず、みな一緒に大文字の‘Reason’に与っていてもいるのであって、後者を指して著者は「共通理性」と名づける。

問題は、共通理性を、創造主の作意から逸脱させて人為を以って手懐けてゆこうとする場合に生じるのだ。国家ぐるみの教育を、共通理性の指し示すところにしたがって営んでゆこうとする歴史的脈絡が出来ると——国民教育制度の成立・展開という近代史の動向が登壇するに及ぶや——この問題が深刻なものとして現われるに到る。創造主の作意に沿うこと、すなわち理性に適う当為や法則性の発現と、それから逸脱すること、これら双方の識別の難しさに直面することになる。その意味で、国民教育制度はその歴史的誕生の当初からして既に危うさを抱え込んでいたのだ。

共通理性の存在を認めず、各人の利己的行為として具現する小文字の理性のみを肯認する有力な考え方もあるが、著者としてはそれに満足するわけにはいかない。なぜならば、教育という営みの正当性は、共通理性によってこそ支えられねばならぬ、と考えるから。「教育は共通理性の重要な一角を占めており、それを通すと、他の領域の営み……のゆがみや独りよがりが見直観される。」（222頁） さらに、教育営為の正当性を根拠づけるはずの教育学は、共通理性を広く育むための培養地だ、ということになる。

著者による議論の筋を忠実に辿ると、以上のようなになるであろう。

### 式-(1) 批評としての言及

理性は遍在する。ひとの心の内（魂の中）にだけでなく、探究的営みの足跡にも生命や自然のはたらきの中にも。著者はそれを、創造主の刻印したようなものとしてイメージしていて、



人為の為せる業とは異次元にその発生源を見ている。人為はむしろ、理性を僭称し詐称してひとびとを特定の利益に従わせるべく操作的にふるまう（手懐ける）。——このあたりまでは、わからなくはない。だが、その先へ読み進むと、論旨を見通し難くなる。

理性を共通に有している者たちの間では、いかに未知の遠方からの来訪者であろうとも同胞として迎え入れる（歓待する）ことができるのだ、と述べられる。……⑦ だが他方では、国民教育制度の歴史的形成に関連する叙述箇所では、「共通理性の指図を、誰がいったい見抜くことができるのであろうか」という問いかけを提示する。……④ 著者はこの著作で、（ロールズ流に）普遍的妥当性を権利請求しうる原理の定立に依拠して正義や倫理を導出することに対しては、敵対する立場を一貫して採り続けてきた。むしろ、ローティの学知的方略を採り込んで、アイロニカルなリベラリズムとプラグマティズムとの折衷策を以って、リベラリズム本流を蘇生せしめ、著者にとって不本意にも甚大なる揺らぎをもたらされてあるモダニティ——西欧近代の合理性志向のあり方——を生き残らせようと図っている。その筋からは、先ほど挙げたうちの④の方が了解しやすい。⑦を読解するためには、たとえば、各人に備わる“小文字の理性”がなんらかの機縁に覚醒し、相互にはたらきかけつつ共振・共鳴し合って、いわば自生的に共通理性がかたちづくられてくる、と読み込むような繋ぎの理屈を差し挟まねばならない。ところが、そのような繋ぎの理屈は、ある苦しさにつぶかる。著者は、ハイエクやドーキンスの所説を紹介したうえで斥けることを通して、謂う所の共通理性を、自生的にかたちづくられるものとして捉えるわけにはいかないと考えている、そのように推察されるのだ。さらには、共通理性は教育学を通して——“教育”への学知的探究に形象化され具現されてくる理性を通して——育まれるのだ、と論じるのであるから。そうであれば、教育学はいったいなにゆえに、いかにして、共通理性なるものを育むことができるのか？ 重ねて問うならば、“教育”という営みそれ自体が共通理性の働いている重要な場を占めているのだなどと、どうして言えるのか？ そのことが問われねばならない。こうした問いそれ自体に著者が向き合い解き明かそうと試みた形跡は、しかしながら、いささかも見当たらない。

### 【参度：教育財の分配に関する優先論と「教育倫理学」をめぐる問題論的構制】

参-(0) 終章における主題に寄せて

「教育の分配論」への取り組みは、教育（という財）を誰が分配すべきかという分配主体の側に考察の焦点を合わせれば、（その学的アプローチが）尽くされるわけではなくて、教育という財を誰にこそ優先的に分配すべきか、という被分配者の特定に焦点を合わせて考察される必要もある。後者の学的アプローチの特徴は、教育財の被分配者についての優先論という方向を採るところに、見て取られるべきことになるだろう。こうした方向を採る学的アプローチには、特に倫理的観点からの解明が深くかかわってくるため、「教育倫理学」と名づけてもよい学領域になる。——著者はこのように述べたうえで、次の自問自答に進み行く。「誰にこそ教育を分配すべきか」という問いに対して、「最終的には、それぞれの個別の場面で政策的・現実的に回答されていくことであるが、そこに到る過程が公正なものであるためには、あらかじめ問題の構図が示される必要がある。」(224頁) いましがた挙げた問いに対して解決を図るための基本的構図を明らかにするのが、教育倫理学だ、ということになるのだろう。

著者の叙述に沿ってなるべく忠実に主題を示すならば、上記ようになる。このように主題を汲み取ろうとしてもなお、腑に落ちないのが、なにゆえに「教育倫理学」と名づける必要があるのか、という点だ。著者としては強い意図をもってその呼称を選び取ろうとしているよう

なのだが、その意図するところが理解しがたく感じられるのである。その隔差にこだわりつつこの章を読んでいくこと。それが、考察にあたっての視座といえよう。

#### 参-(1) 「教育財の分配論」の地平

「教育財の正当な分配のあり方」を全体を通じての主題とする著作がその最終章で、被分配者についての優先論というかたちを持ち込まれたわけだが、この章の行論を統御する意味秩序系から——中でも特に、「教育財を誰にどのように分配するか」は現実次元に立てられた問題だ、とする言明（232頁註（4））に止目するところから——窺われるのは、著者が商品語の世界の中で、諸個人の利得獲得をめぐる競争的環境状況下での“正当性”を帯びた（“公正なる”）財分配を行なうための図式（構図）を描こうとしていることである。著者にあっては、商品語の世界内部での“正当性”を選び取る議論が「倫理学」の呼称を用いるのに相応しい、と黙示的に感じ取られ思念されている。それに比してこのわたし（筆者西口）には、倫理学をば、〈商品語の世界での“正当性”選択を意味構成する前提〉をメタ次元から問う議論場面においてこそ、用いるのが相応しい、と感じられていた。そのことを著者のここでの議論に触れることを機縁にして覚識しえた。わたしがこだわったかったのは、まさにこの隔差だったのだ。

#### 参-(2) 商品世界での財分配と倫理学との直結

著者にとって「教育なるもの」と「非教育なるもの」を区別・識別することは、さして困難を感じることはないはずだ。ひとの能力開発を促す意図的行為（＝作為）であってしかも商品語に載せられる（組み込むことができる）、そのような作動・営為は教育なるものであって、それ以外は非教育なるものである。“教育財（資源）の分配論”とは、とりわけ、被分配者の特定に重点を置いた“優先論的教育財（資源）分配論”とは、結局のところ、商品世界での財分配をめぐる“正当性”に関する議論だったのであり、その議論を著者は、「教育倫理学」と称する学知的探究と直結させようとしているのだ。

#### 参-(3) 第1節「優先論」を読む

先置された諸章ではいまだ取り組まれることのなかった主題に、この終章では取り組まれていく。その主題とは、教育という財を「だれにこそ優先的に分配すべきか」という問いかけに収斂されるところの主題である。つまり、教育資源についての被分配者の特定に関する主題であり、この主題をめぐる議論を教育資源に関する「優先論」と呼ぶことができる。この主題に取り組み、解明を図るには、倫理学的観点からのアプローチが（も）要求されることになる。この点を強調するために、「教育倫理学」という呼称を用い、上記の主題にその学的観点から問い迫ることを意識化してゆく。そのように著者は述べている。

《この節では、次節の内容への繋ぎとして既に、平等理論を擁護する立場からの「優先論」を紹介している。なんらかの資源について緊急な必要性を抱えるひとに、その資源を優先的に分配する、という基準——「緊急性」の基準——によって、（『コウモリであるとはどのようなことか』（*Mortal Questions*）第8章「平等」特に182-184頁および193-195頁に見られる）トマス・ネーゲル流の優先論が構築されていることが、紹介されているのだ。》

#### 参-(4) 第2節「緊急性という基準」を読む

前節から続かたちで、平等理論の立場からトマス・ネーゲルの唱える「緊急性という基準」

が優先論としての議論構築のための中心に位置づく基準たりうるかどうか、その点が検討されている。著者のここでの検討によれば——特にネーゲルの提示する「平等の価値を試すテスト」に対する検討によれば——，“ネーゲル流の「緊急性という基準」は基準としての受け容れがたさが最小であるゆえに受け容れが認められ合意に到る”とする論理に向けて、強い疑念を呈し、さらにそれに留まらず否認するスタンスを採るという結果に到ること、そのことが見て取れる。

参-(5) 第3節「稀少財と『社会的限界』」を読む

教育財の分配論の中で「優先論」へと問題を焦点化していく必要性が生じる理由はなにか、という問い。この問いへの応答は、著者によれば、教育財に帯びる稀少性の——「稀少財」としての性格を教育財がまぬかれないことの——ゆえなのだ、ということになる。

教育財に帯びる稀少性は、「教育財の供給増によっても、教育を受ける権利の保障の普遍化によっても解消されることはない。」(230頁) つまりこうである。教育を受ける者各々に対応させるかたちで、教育財の消費実績についての測定と記録が為されるわけである。測定され記録された教育財の消費実績は、人的能力の選抜・配分としての社会的メカニズムの中に（メリットクラシーに拠って立つ社会統制の機制の中に）組み込まれてあるがゆえに、一元的価値階層上の地位＝等級として秩序づけられ処遇されることになる。それはきわめて重要で必要不可欠な社会的統制の機制としてはたらくはずである。そうであるからして、教育財の供給増および教育を受ける権利保障の普遍化という事態の中にあっても、能力の開発を公正に行なうために《ということはすなわち、教育財の供給-消費のありように照らして見て取れる実績＝効果における差異を正確に測定し記録する必要性のゆえに》、「だれにこそ教育財は分配されるべきか」という問いかけを——教育財についての優先論を——社会は保持し続けねばならないのだ。

参-(6) 宮寺流「教育倫理学」の射程——人的能力の選抜・配分という機能遂行との相即  
この章の締めくくり部分（所謂“結び”の箇所）での記述が次のようになっていることに、注視するよう促したい。

教育財の稀少性は、教育財の供給増によっても、教育を受ける権利の保障の普遍化によっても解消されることはない。教育財の供給自体が人的能力の分別と選別の社会的機能を不可避免的に帯びている。それだけに「誰にこそ教育は分配されるべきか」の問いかけから、社会は逃れることはできないのである。(230頁)

著者にとって自明のこととして保有されてある意味秩序系の中では、教育財とは意味の戯れの中で折に触れて創造され生成しうのような性質のコトではなくて、既設の商品価値世界における秩序下でその供給に制約が随伴するはずのものであり、また（大枠としては貨幣換算されることが立論の前提とされているのを洞察できるから）一元的価値尺度を以って計量しうところの、価値を帯びたモノでもある。そういう教育財がだれにどの程度に分配されるかに応じて、分配された個人の能力が——（第5章での結論に依るならば）当の個人主体にとって基幹をなす構成要因であり、その自己同一性の一部を成しもするところの能力が——どこまで開発され得て（商品語に翻訳される）価値をどこまで高められるかが左右されるのだということ。そうしてまた、当該社会世界の生産性と効率性とが左右されるものだということ。これはもう、著者にとってはあらためて説明するまでもない当然のこととみなされてある。こうした意

味秩序系の内にあって“正当性”を承認され得る分配のあり方を、特に被分配者に焦点づけられた優先論的分配のあり方を、追求する知的営みを指して、「教育倫理学」だと言う。これはしかし、かねて「選抜の社会学」などと称して追求されていた営みととても近い、と思わずにはいられない。

#### 参-(7) 限定された意味秩序系と“倫理学”や“社会哲学”の独自性を帯びた摸索

前項で言及したように、著者は、商品世界-等価交換を自明視する意味秩序系の内にじっと身を繋ぎ留めて、思考する。その思考は、著者謂う所の“社会哲学的”であったり“道德哲学的”もしくは“倫理的”であったりする観点から、教育資源の分配問題についての解明をめざすものだ、と思念されている。その思念にしたがって、研究活動が積み重ねられてきた。その研究活動たるや、関連学問領域では他に類例を見ないほどの見識の深さ・広さを示すものであり、しかも未開拓な課題領域への旺盛な探求意欲を読む者に感じさせてくれる性質のものだ。そうして得られた成果を発表するかたちで刊行されたこの著作の特に終章は、近代資本制商品世界を歴史の完成形態だとみなす者にとって——そういう者にとってのみ——深く得心できる内容のものとなる。

#### 参-(8) 権原理論と宮寺流「教育倫理学」

終章での問題論的構制を我々は前項までの考察を以って捉えることができた。この項では、本稿のここまでの論及において直接には取り上げることのなかった第五章「権原理論と自然資産としての能力」——筆者の見るところ、対象としてきた作品の中心をなす章を三つ挙げるとするならば、第七章・終章と共にもうひとつの中心をなしているとして挙げることになる章——での論点と絡み合わせて、著者宮寺の問題論的構制の核心を、明示的な記述の背後にある問題感覚にも推察の視線を届かせることによって、浮き彫りにすることを試みる。

まずひとつ目に、ひとと能力との関係づけ方に視軸を向けよう。“能力は、その所有主体の構成要因であり、その自己同一性の一部である”とか、“能力はその所有者そのものを表示する”とかという捉え方をすべきだと述べられている（160頁）。これはまさに権原理論の——自己所有権命題の——核心部を正当化する思惟である。

ふたつ目に、【能力の開発可能性-環境の再構成可能性】という可能性連接態の实在（を認識すること）を殊のほか、重要視し強調する構えを採っている。これは、既に序章や第一章においても現われていた構えなのだが、第五章においても基層をなしている。この可能性連接態の实在を認識することによって、ロバート・ノージックには（著者にとっては権原理論の唱道者として学ぶべきところの多いノージックには、しかしながら）欠落している大切な視点に気づかれてくる、と考えているようだ。

上記の事柄と密接に関連しつつみつ目に、能力のひとへの帰属をめぐるのは自己所有権命題を粗野なかたちで当て嵌めるわけにはいかないことが、論じられるに及ぶ。端的に言って次の問いをどのように取り扱うか。すなわち、“能力の開発は自己努力によるのか、社会的協働によるのか？”という問いをどのように取り扱うか。すこぶる大雑把に答えるとすれば、自己努力と社会的協働との双方が合体するかたちで能力開発をもたらす、ということになる。とはいえ、この点にかかわってはひとの成長段階にいま一歩分け入って考察する必要がある。成人に到るまでの段階では社会的協働の産物として再構成されて備給される教育環境（という能力開発のための条件）を、公正という原則に従って整備し充実させるべきである。成人以降の段

階での能力の開発は基本的には自己努力によるべきである（148頁）。

上記のところからわかるように、よつつ目には、成人に到るまでの段階では能力の開発のための環境的条件を公正に備給すべきだ、換言すれば、教育財の分配を公正に為すべきだ——教育財（教育サービス）を消費するための機会を実質的な公正さを備えて供給すべきだ——、という主張がなされることになる。この主張の実践上の含意は、教育の機会平等を実質化するために、初等教育や中等教育初期段階までは生育環境の上でより恵まれない環境にあることも・青年に対してより手厚い教育機会の保障を行なうこと、中等教育中期段階以降ではそれぞれの青年に顕現してきた能力上の適性に応じた（差異ある能力適性の開発の必要に応じた）分化した教育財の分配・供給を、そしてそれに対応した、教育財の消費機会の保障を行なうこと、というところに行き着くであろう（——とりわけ「選択意思の原因」（146-149頁）という箇所での議論をふまえて）。教育財のそのような分配およびそれに呼応する消費を経て開発された能力のありようは、各人の獲得物であり獲得における正義に適っている。

いつつ目に、以上の論及ではこぼれ落ちてしまうがゆえに起こりうるひとつの疑念に対して論及されている部面がある。それは、ジョン・ロールズにおいては強調して取り挙げられていたところの、ひとそれぞれの生得の能力の相違に随伴する偶有性、これをいかに取り扱うか、という部面である。謂う所の偶有性を著者は問題化する構えを採らないで、能力の生得性をばその人固有のもの・固有の人格と不可分のものとみなして済ませる（149-150頁）。つまり、偶有性を身に帯びた「能力の初期配分」は、基本的にノージックの所説に従うかたちで、「獲得における正義」に該当するものとみなすわけである。別様に言うとなると、「能力の初期配分」での差異を正当視して受け容れるというわけにはいかないとする方向性——謂う所の「能力の初期配分」における差異を分配的正義の論題として問題化を進めようとする方向性——、これに向けては拒斥する構えを採るわけだ。

かくして、著者の提起する教育財分配の公正さの原則に依拠する能力開発の過程についてのみならず、「能力の初期配分」についても、すなわち各人にとっての能力の初期配置（付着）およびその後の開発（形成）という歴史全体を通じて、獲得における正義が実現される運びとなるのだ。

ここにおいてさらに、教育財の供給主体に備わるべき資格に関して補っておこう。著者がこの作品を以って論究しているところの、教育財分配の公正原則、これを十分に体得しえていることが、謂う所の資格になるだろう。その資格を備えたものが教育政策形成の主体や教育行政推進の主体となって活動することによって、教育財の供給主体が向き合うべき諸課題がしだいに解決されてゆく。そのように見通されているように推察される。

いまや我々は、公正なる教育財の分配論を推し進めようとする著者の論立ての体裁に、合理性と首尾一貫性が見られるのを知ることができる。その論立ては、「公正なる」能力開発のあり方を権原理論をこそ基軸にして探求する過程を提示するものであり、権原理論の意味秩序系の内側で公正さを具備しえた教育財の分配のあり方、これを見定めていこうとする思惟の表示である。能力の生得性に、そしてまた後天的なる能力開発のあり方に、不可避に随伴する偶有性への問いはしかしながら、とうてい癒えぬ傷口を開いて我々に残されている。

## 【註】

- ◆<sup>1)</sup> ここに謂う所の「財」と「資源」とはいずれも、人の欲求を充たしうる事物というほどの意味で用いており、両者を識別する必要性はあまりないであろう、という想定で表わしている。とはいえ、敢えて

識別するとすれば、次のようになるであろう。「財」とは、人の欲求を充たしうる事物について、特に市場価値を現実的に具備してあるという意味枠組に依拠して照らし出されてくるものの・事物の有している・人の欲求を充たしうるという・イデアルな契機のことを指し示す。それに対して「資源」とは、人の欲求を充たしうる事物を（いまだ凝固した意味枠組に収まるまでには及んでいないところの）そのレアルな契機において対象化して指し示す語である。

- ◆<sup>2)</sup> この論稿が主たる対象としている著作（宮寺晃夫『教育の分配論』）からの引用やその著作への言及の場合には、その箇所の示し方としてはここでのように、頁数のみを表記する。
- ◆<sup>3)</sup> このように推察されるのは、教育という財について、あるいはまた、「教育の視点」について、宮寺によって次のように述べられているところからである。「教育という社会の共有財は、社会にたいする責任を担い得る成員を産み出していく限りでの共通資本であり、社会の側の責務と社会にたいする責任との結節点に教育がある。この『教育の視点』を入れていかないと、財の公正な分配は語れなくなるのである。」（4頁）
- ◆<sup>4)</sup> ここで著者宮寺の論旨を適切に理解するための前提として、能力主義（や業績主義）と権理理論とは互いに斥け合う関係にあるのではなくてむしろ親和する関係にあるのだ、という点に言及しておこう。〈各人の能力に応じた処遇〉という能力主義は、〈ロバート・ノージック謂う所の〉非歴史的な「パターン付き」配分原理なのではけっしてない。能力という保有物に関する、まさに歴史的な「獲得における正義」に合致する原理なのだということ。そのことが前提視されているはずである。ただし、ノージック流の、保有物に関する「獲得における正義」を単純に適用するだけでは、能力主義が充たすはずの獲得における正義を説明しきれない。その説明のためには、各人の能力開発の過程に教育財の分配のあり方が関わってくるのだということ、しかもその教育財分配のあり方が公正さを具備する必要があるのだということ、これらのことを論究しなければならない。著者はそのような課題意識をもって取り組んできたのであり、その成果がこの作品なのだ。
- ◆<sup>5)</sup> こうした論脈に向けて少し注意を働かせれば気づくこととして、ひとそれぞれの生得資質のことが——謂う所のひとの特性の形成要因の中で当人の制御が効かないはずのことが——議論の対象から外されているということに想い至る。この点については後の【参度】の中で、若干、立ち入って論及している。

## 【文献】

宮寺晃夫 2006『教育の分配論』勁草書房

トマス・ネーゲル 1985→1989（永井均 訳）『コウモリであるとはどのようなことか』 勁草書房

Nagel, Thomas 1985 *Mortal Questions*, Cambridge University Press

ロバート・ノージック 1974→1989（嶋津格 訳）『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社

Nozick, Robert, 1974 *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books Inc.